

---

# 黄昏と暁

福水清一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄昏と暁

### 【Nコード】

N0003Z

### 【作者名】

福水清一

### 【あらすじ】

地球の国はアンドロメダとマゼランという大国に分かれていた。その二国の大戦争の末、アンドロメダは勝利。新型ロボット兵器「アームズドール」が鍵を握っていた……

## 一章

「君が真戸原界斗、だね」

小さな部屋。四畳半も無いだろう。壁も床も天井もすべてコンクリート製。ところどころのスプレー缶での落書きが部屋の刺々しさを増す。部屋の真ん中に小さなテーブルがあり、椅子が二つ向かい合うように置かれている。その椅子に、二つのシルエットが腰掛ける。一つの壁に外への扉、そしてその向かいには中から見えないマジックミラー。いかにも尋問室だ。

「……そうだ」

右側の男が顔を小さく背ける。漆黒のロングコート、白いシャツに黒いスラックス。赤いネクタイが首から吊るされ、ネクタイの上に十字架のネックレスが垂れる。年は二十代前半。無駄な筋肉の無いすらりとした体は鍛えこまれた軍人を思わせる。テーブルに広げた両手の左手に指輪を三つ、人差し、中、そして薬指、に付けていて、右手のほうには手の甲に青い『クロウリーの六芒星』のタトゥーが刺繍されている。色白な肌に白銀の髪。顔は驚くほど無表情なのだが、彼の黒眼の最奥には微かな絶望を露にする。それも今出来たものではなく、昔からあったような微かな絶望だ。左の男が両肘をテーブルに乗せ手を組む。

「まさか、こんな眼をした人だとは思わなかったな」

男は頭を小さく振りながら溜め息を吐く。年齢は二十半ばから後半のはずなのだが、顔と口調の幼さが少年かと思わせる。男の筋肉が無いかのような細い体は青いアンドロメダ国軍の背広制服を着こなし、茶髪の頭は青い帽子が覆う。茶色い眼と細い鼻、小さな笑みを顔に浮かべ、男は顎をかく。

「真戸原界斗。22歳。元マゼラン軍隊伍長で、所属は陸専用量産型戦闘ロボ『アームズドール』主体の特殊部隊『SAU』（Special Assault Unit）。前の大戦の後に軍が解体

されてからは行方不明のはずだったね。まさかこんなところでの収穫なんて」

男は胸のポケットから一枚の写真を取り出し、界斗に向ける。界斗は驚いたように眼を一瞬見開く。

写真は昼間に撮られていた。背景には大森林、山脈、そして全頂8mの『アームズドール』が三機。八人の迷彩服の男達が腕を組みながら笑顔を見せる。真ん中の白銀の髪と黒眼の男。界斗と瓜二つだが、瞳には絶望が一片も無く、カメラに笑顔を見せる。首から吊るされたネックレスは太陽の光を眩しく反射する。男達の年齢は皆若く、白人、黒人、東洋人、ヒスパニックと人種はさまざま。全員アランと同じ青い『クロウリーの六芒星』のタトゥーが右手の甲に刺繍されてある。

「その反応を見ればビンゴのようだね。本当にびっくりしちゃったよ。だってそこらへんの道で行き倒れてるんだからね」

「……」

界斗は無言を貫き通す。男は肩を回し、ほぐす。

「行き倒れて事はどうせ就職もしてないんでしょ、マゼラン軍隊の解体の後から」

「……ああ」

「だったら、僕達のために働かない？新政府のアンドロメダ国軍対ゲリラ機動部隊の人員が今不足していてね。元マゼラン軍隊の『SAU』なんか超大歓迎なんだけどね」

界斗は何かを疑うように眉間に皺を寄せる。

「何が目的だ」

男は微笑する。

「僕は何も企てては無いよ。行き倒れの君でも知ってるでしょ、今の世界情勢を。今、世界は一つの国家『アンドロメダ』に纏まって平和に向かおうとしている。だから新政府は大戦時の敵、『マゼラン軍隊』を解体した。でもやっぱり人間すべてが同じ価値観を持つことは絶対に無い。そういう人たちは今、反政府ゲリラとして平和

への道を隔てている。だが、大戦後に国軍を辞めた人たちが続出していてね。反政府ゲリラがマゼラン軍隊主体だからか、今、我々は君みたいなマゼラン軍隊OBをこちらに引き込もうとしているんだよ、敵と合流する前にね」

界斗の顔は無表情のままだが、瞳の奥の絶望に怒りが加わる。男は嘲笑する。

「祖国を潰したアンドロメダなんかにつくものか、って顔だね。だけど、君は我々に付かなければいけないんだよ、界斗君。確か、君は生きること執着心が強かったはずだ」

界斗の両目は驚きで開く。

「僕は知っているんだよ、君の爆弾を」

突然、界斗の体に激痛が走る。雷が通るような痛み。痛みの閃光は右手の甲から全身へ辿る。

「おっと、そろそろだね」

界斗は息を荒げ、顔を両手で隠す。体からは苦痛のオーラが滲み出る。男は笑みを顔に浮かばず。

な、なんだ？界斗の目の前の世界は一瞬真っ暗になり、その後、一つの情景が浮かび上がる。朝、森の中に霧がこもる。周りは木々が生い茂り、視界は悪い。界斗は自分を見ている。マゼラン軍隊の紋章入り迷彩服にヘルメット、左手にはベレッタ社製のアサルトライフル『ベレッタAR70/90』、腰にはサバイバルナイフに拳銃『ベレッタM92』、そして背にはサバイバルキットや救急セット、弾薬やシヨベル、食料や水筒の入ったナップサック。身に付けている防弾チョッキも相俟ってかなりの重量だ。

辺りは静か。地面には自分以外の足跡は無く、生物の気配は全くない。いや、微かにある。界斗は右に振り向き、『ベレッタAR70/90』を突き出す。すると、気付く。そこに立っていたのは、もう一人の自分だった。

服装は全く同じ。マゼラン軍隊の寂れた紋章入り迷彩服、ヘルメット、リュックに『ベレッタAR70/90』が左手に。ただ一つ大

きな違いがあつた。もう一人の自分は、口が裂けそうなくらい大きな笑みと、狂気に満ちた瞳を見せる。界斗はこの情景を知っていた。そして次、何が起るのかも。マズルフラッシュの閃光が視界を白一色に変化した後、世界は暗転した。

「嘘はつくなよ。あるんだろ？殺しの衝動がさ。無いとは言わせないよ。さあ、契約はするかい？」

界斗はゆっくりと顔から手を離し、顔を見せる。荒かった吐息は静まっている。自分の手というマスクを外した界斗の顔は、口が裂けそうなくらい大きな笑みと、狂気に満ちたような瞳を男に見せる。握りこぶしになった両手をテーブルに乗せ、腕からは血管を浮かばす。殺気に満ちた風貌は先ほどまで体の中に充満した苦痛を全く見せない。あまりの変化に男はちよつと驚くが、顔からはすぐに笑いが零れる。

「ははは、こんにちは、ファントム君。」

界斗だった者は殺気に満ちた瞳を男の視線と一致させたまま、首をかしげる。

「黙りな。殺させてくれるんだろう？早くしろ」

「待ってくれよ、ファントム君。今はまだそのときじゃない。僕た

ー

「話は聞いてた。契約はする。この衝動を治まらせるくらいの殺しをさせてくれるんならな」

「もう一人の君はかなり消極的だったけど、いいのかい？通常の場合彼は彼が行動してるんだからね」

「そんなのどうでもいい。俺はただ殺させてくれれば良い。それだけだ」

「そうかい。じゃあ……」

男はペンと紙を一枚取り出す。紙はびつしりと字で覆い尽くされ、最後にサインの線が引いてある。ファントムは男からペンを奪い取り、大文字でサインを書く。怒りをぶつけたような禍々しい文字だ。

男は顎をかく。

「ちゃんと読まなくてもいいのかい？ 契約書なんだから」

「そんな面倒なこと、あいつにやらせればいいさ。ああ、疲れたなあ。俺はもう寝るから、殺しが始まったら呼べよ、えっと、誰だっただけ」

「僕？ 僕は…… ムート、ムート・ハーリヒカイトだ」

「面倒な名前だな。まあいい、殺しが始まったら呼べよ、ムートさんよ」

「お休み、ファントム君」

ファントムは顔を手で隠す。ちよつと間が空いた後手を離すと、あの狂気に満ちた顔のファントムではなく、最初の無表情の界斗に戻る。瞳の最奥の絶望には驚きも混ざる。その瞬間、ムートはテーブルの下に隠していたストップウォッチを止める。七分十八秒。それくらいが限界なのだろうか？ いや、それは久しぶりに出てきたからだろう。骨折が治ったあとの最初の運動は異常に疲れるのと同じだ。時間がたてばなれるだろう。

「どうだい、界斗君。感覚は戻ったかい？」

「まさか…… あいつは、ファントムはこの二年は出てなかったのに……」

「まあ、どうでもいいけど、彼、契約して帰って行ったよ」

界斗の瞳が見開く。

「……」

「おつと、契約書は無効には出来ないよ。ここ、読んでみな」

ムートは契約書を取り、界斗に見せる。

「契約者が契約満了前に契約破棄した場合、契約者は抹殺される。ほら、書いてあるでしょ。死にたくないなら、戦いな」

「…… そんなこと」

界斗は立ち上がる。その瞬間、ムートはテーブルの下からあるものを取り出す。筒状のなにかだ。長さは十センチほどで、色は灰色。筒の先に赤いスイッチがあり、そのスイッチには簡単な弾みで押せ

ないように透明なカバーがついある。筒の横に名前が荒く彫られている。

「KAITO MATOHARA」

ムートは筒を手の中で回す。

「久しぶりだろう、これを見るの。手に入れるのに苦労したんだよ、君の起爆スイッチ。君のもう一つの爆弾。こいつがあれば、君はいつでも木っ端微塵に出来る。フッフ」

界斗は激しくテーブルを叩く。木製のテーブルは真っ二つに割れる。

「……くっ……そ……」

そのまま、界斗は床に倒れる。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0003z/>

---

黄昏と暁

2011年11月30日09時01分発行